

MOVE the NEXT動かす。次代。広げる。未来。>

JIMHニュース

第12号

2024年新年賀詞交歓会

2023国際ロボット展 報告

機種別部会・全体勉強会

統計調査報告

第13期マテハン塾 発表会&修了式

新入会員企業紹介

2024年新年賀詞交歓会

東京會館大手町で賀詞交換会を開催、 経産省・国交省の両省からも来賓



1月24日(水)、(一社)日本物流システム機器協会の新年賀詞交歓会が、前年同様の東京會館大手町LEVEL21(東京都千代田区)にて開催されました。会では冒頭、司会者より能登半島地震の被災者に向けてのお見舞いと、一日も早い復興を祈念するメッセージが述べられた後、協会の下代博会長が登壇し、以下の要旨で挨拶されました。

2024年問題本番の年、協会あげて努力を

元旦の令和6年能登半島地震により、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りすると共に残された家族の方々に謹んでお悔やみを申し上げます。



下代会長

昨年を振り返りますと、世界情勢ではロシアによるウクライナ侵攻がいまだに収束せず、イスラエル・パレスチナ情勢が悪化する等不安定な状態が続きました。一方で国内では、ようやくコロナ禍を抜け出し、社会経済活動が正常化してきたと実感されるようになり、インバウンドの増加等で景気の押し上げも続いているのではないのでしょうか。

今年はいよいよ物流の2024年問題が本番を迎えます。我々物流システム機器業界は、物流業務の省力化・自動化ニーズの高まりによって発展を続けてきましたが、ここへ来てさらに我々の事業環境にインパクトをもたらすのがこの課題です。

一方、当協会の会員の多くは荷主としての立場もあります。このため会員各社には2024年問題について当事者としても取り組んでいただきますようお願いいたします。

また製造業においても、海外生産からの国内回帰や、部品・製品の在庫にある程度の量を確保する傾向が表面化してきており、これに伴う新設工場における保管能力の増強など、物流システム機器への投資は一層加

速するものと思われます。

当協会は、この提供を担う各社が事業を通じ、DXの達成あるいは持続可能な社会の実現に貢献できるような努力を続けて参りますので、皆様のより一層のご支援をお願い申し上げます。

*

会長挨拶に続いては、来賓を代表して経済産業省製造産業局産業機械課の安田篤課長、続いて国土交通省物流・自動車局物流政策課の平澤崇裕課長の代理で同課国際物流室の鈴木淳室長が登壇して挨拶、要旨は以下の通りです。

コストカット型から成長型経済へ脱皮を

日本経済の状況、昨年は大きな潮目の変化を迎えた年で、国内設備投資、賃金水準が30年振りの高水準となり、今年はその流れを継続していかなくてはと認識しています。昨年までのコストカット型経済から、今年には賃金も物価も投資も伸びる成長型経済に変えることが大きなテーマです。



経産省・安田課長

昨年末に決定した経済対策の中にはDX、GXもサポートメニューとして組み込まれ、地域の中堅中小企業の国内投資促進を促すメニューもあり、賃上げ促進税制を抜本的に強化しています。サプライチェーン全体の観点では価格転嫁が重要で、昨年末には公取から労務費の適切な転嫁のための価格交渉に関する指針も公表しているので、活用いただきたい。

今年には2024年問題がやって来る年で、経済対策でも荷主企業の物流システム設備の効率化や生産性向上へのサポートメニューにも国交省と共に取り組んでおり、法整備と併せて取り組んでいきます。

*

物流事業者、発着荷主、消費者が三方良しに

物流は国民生活および経済を支える重要インフラです。構造的な人手不足やカーボンニュートラル対応等、様々な課題に直面し、2024年という物流にとって極めて重要な年を迎え、国交省では2024年の抱負として次の3本柱で諸課題の解決に取り組む方針です。



国交省・鈴木室長

一つ目には、2024年という年を、日々刻々と深刻化していく担い手不足に抜本的な対策を打つ始まりの年にすべく、関係者と連携して取り組みます。

二つ目は、価値を価格に、という観点で、物流に時間価値、環境価値、その他様々な価値を提供していきます。

最後に三方良しということで、物流の効率性や生産性を向上させることで、物流事業者という売り手と、発着荷主や着荷主、消費者という買い手がウインウインとなり、経済社会が発展するよう取り組んでいきます。

また物流効率化の推進を支援する施策として、今年度補正、来年度当初予算と併せて約300億円の予算を用意しましたので是非ご活用ください。

*

来賓挨拶に続いて、協会の大庫良一副会長が登壇し、以下のように述べました。

国土強靱化の基本となる物流を底支え

今年は、能登半島地震そして羽田空港での大きな航空機事故と、大変な元旦と二日目で明けました。そうした事情を鑑み、今日は乾杯の発声は自粛しておこうと思います。

2024年問題がいよいよ目の前に迫り、少子高齢化が残念ながらもますます進んで、労働者不足は一層顕著になっています。その中で国土強靱化のプラットフォームとなるべき物流、これをしっかりと底支えしていくのが当協会加盟各社の責任ではないのでしょうか。

先ほど価格転嫁の話もありましたが、ベースアップもどんどんやっていきましょう。そのためには利益を



大庫副会長によるガンパロー発声

出さなければなりません。顧客に満足していただける機器システムを提供し、その分を転嫁させてもらえるよう励んで行きましょう。

今年、皆さんと一緒に、物流を止めないためのプラットフォームをしっかりと作っていきけるよう、心を合わせて頑張っていきましょう。それでは、私の発声に合わせてご唱和ください。「ガンパロー!!」。

力強い発声の後には、会場全体で和やかな歓談が繰り広げられました。

*

その後、宴たけなわの会場では協会の川田基浩副会長が登壇し、中締め挨拶を行いました。要旨は以下の通りです。

冒頭の会長のお話と重なりますが、能登半島の震災に心よりお見舞い申し上げます。当協会会員企業の皆さんも直接的に被害に遭われたり、また間接的に顧客の支援に回られたりと、何らかの影響受けられている事と思います。そういった皆様の安全、そして一日も早い復旧のために、手を携えて、協力してまいりたいと思います。



川田副会長

厳しい新年の幕開けとなりましたが、気を取り直し、皆様のご健勝と物流業界の振興を祈念して、三本締めで締めたと思います。

威勢のいい三本締めで、今年の賀詞交換会は中締めとなりました。

iREX2023物流システム・ロボットゾーンに JIMH会員企業9社がブースを出展



4日間合計の来場者は14万人を超える大盛況

去る11月29日(水)から12月2日(土)の4日間、東京ビッグサイトに於て、(一社)日本ロボット工業会、日刊工業新聞社主催の2023国際ロボット展(iREX2023)が開催され、当協会は会場内の併催企画「物流システム・ロボットゾーン」を共催、非協会企業の出展と合わせて東西で15社132小間にてエリアを構成しました。

初日には開催に先立ち、洗浄総合展、VACUUM真空展、高精度・難加工技術展、SAMPLE Japan先端材料技術展、表面改質展、KOKOKARA Fair in Autumnとの合同開会式が行われ、主催者代表挨拶、来賓祝辞に次いで、記念のテープカットが行われ、幕を開けました。



出展者数654社・団体、出展小間数3,508小間はいずれも過去最多で、開催期間の4日間は晴天に恵まれ、14万8,125名の総来場者数を記録しました。

以下、併催企画ゾーンに出展いただいた会員企業9社の展示内容を、ワンポイントでご紹介いたします。

様々な工夫でロボット展に相応しいブース展開

IHI物流産業システムは野村不動産との共同事業で2025年3月にスタートする自動倉庫シェアリングサービスを前面に展示しました。デベロッパーが供給するマルチテナント型物流センター内にIHIの自動倉庫を設置し、テナントは共同で自動倉庫を使うシェアリン

グサービスで、荷主は固定設備を所有せずに必要なパレット数に応じてレンタルできるので、季節変動にも対応可能、第一号案件は神奈川県Landport横浜杉田を予定しています。



伊東電機は従来のアーム型とか、人型、カート型ロボではなく同社ならではのコロの原理に基づくパワーモータを用いた「ロボットを超えるMDR式ロボット」をコンセプトに出展しました。MDR式を応用したソリューションによって連続して物を運べるばかりでなく、運びながら仕分けしたり、物を上げ下げしたり、バラしたりという仕事ができる同社独自のロボティクスで、FNR(フレキシブルノイズレスローラ)は最新のソリューションです。



オークラ輸送機は、積みつける、荷物を下ろす、といった労働から作業者を解放するソリューションのAMRであるカートラック牽引ロボットOKURUN(オークラン)と、ビジョン式カートラックの荷物積み降ろし知能ロボットであるロボットパレタイザAi6Fをメインに展示しました。SLAM式のオークランは床のマーキング等のインフラ整備が不要で自機位置をマッピングし自律的に走行します。パレタイザAi6Fはハンド部にカメラをハンドアイとして装着することも可能です。



オカムラは、物流業界の課題を解決するロボットソリューションを紹介しました。同社製の自律移動ロボットORVや、オートストア、ライトピック等を展示しました。ライトピックはマスター登録なしで多彩な商品を扱えることができ、1時間に1,200ピックという高速性能が特徴です。ORVは今回カゴ車に積みつけるファナック社のパレタイズロボットとの連動で、ケース積み付け作業と搬送を自動化するソリューションをデモ展示しました。



西部電機は今回、RENATUS ROBOTICS社とのコラボレーションによる共同出展で、次世代型シャトル式自動倉庫の出展を行いました。

ケース系のピッキング、部品のキット化作業等、既存の製品ラインナップにシャトルを加えることで、トータルソリューションの領域を拡張する狙いです。

出展した協働ロボットについても、インテグレーション、ハンド設計も自社で行い、ロボットとマテハンの融合を標榜する展示をしました。



国際ロボット展に初出展の**シーシーアイ**は、同社製産業用ウレタン車輪を採用する製品メーカーがユーザー顧客で、物流展と異なる層のリサーチとアピールを兼ねて展示を行いました。そのため単品の車輪展示に止まらず、同社製の車輪を採用するワコー技研のAGVをデモ機として展示しました。同社ラインナップの中では、耐摩耗製に優れクリーンルーム等での採用実績を伸ばしているハイグレードの3000Aが売れ筋製品ということです。



ダイフクは搬送ロボットをテーマに出展、パレット搬送仕様のSORTING TRANSFER ROBOT-Lと小物仕分用の同-Sの2機種をお披露目展示し、その他各種映像コンテンツのモニタ投影で様々なソリューションを紹介しました。大型のLはパレット自動倉庫との連携、コンビネーションによるGTPユースを想定して床のQRコードマーキングを基に多彩な動作が可能。小型のSはピース品仕分け用途を主なターゲットにしています。



椿本チエインは国際ロボット展来場者層を意識し、製造現場における課題解決の視点で、工程間搬送を演出・訴求すべく同社主要3品目の設備を展示しました。一つが目玉の新製品T-AstroXで、これは市場に満を持して投入された国産GTPであり同社の注力商品です。二つ目のAIでも鑑定士は、世界最高レベルの高速・高精度AI画像認識技術を用いた判別機で、三つ目が同社定番ラインナップである天井搬送のオートランバングードMark IIです。



村田機械は、パレット搬送ロボット、ケース搬送ロボット、GTPのピッキングロボットといった物流センターの各プロセスで実際に運用されている各種搬送ロボットの実機展示と併せて、物流システムのトータルコーディネーターとしてのスタンスを広くアピールすべく、ロボットを含む自動化機器全体を統合的に管理監視する総合的なモニタリングシステムとして、VRを活用したE-LOGICSのiMonitorをパネルでコンセプト展示しました。



第4回 機種別部会・全体勉強会

ディープラーニングのシェアNO.1 コグネックスの物流向け画像処理ソリューション



独自の画像処理型バーコードリーダーを提唱

2023年度の第4回機種別部会・委員会が11月9日(木)に銀座ユニーク貸会議室(東京都中央区)にて開催されました。今回の全体勉強会は「ディープラーニングシェアNo.1のコグネックスが提供する、物流業界向け画像処理ソリューション」と題して行われ、コグネックス(株)物流事業部事業部長の武田智彦氏が登壇し、以下の要旨で講演されました。

*

「工業用画像処理に特化した最古の存在として長い歴史がある当社は今、ディープラーニングにも注力しながらAIと画像処理の融合ソリューションを世に送り出しており、工業用途においても高いディープラーニングのシェアを誇っております。

工業用画像処理(マシンビジョン)には4つの領域があります。GUIDE(位置決め)は、物の形状を認識して位置を決めることで、検査を始める際の重要な技術です。GAUGE(寸法測定)は物流では3辺計測(体積測定)に使用され、INSPECT(検査)は例えばFA業界だとモードや合否判定、良品と不良品等の検査、物の大きさや色、ねじ穴にバリが残っていないか等々あらゆる検査を指します。IDENTIFY(識別)は文字の読み込みやバーコード読み取りの領域です。

物流業界で昔からよく使われているバーコードリーダー製品にはレーザスキャナが多いですが、当社が提唱しているのは画像処理型バーコードリーダーで、これまで専業メーカーとしてターゲット業界を限定せずに提供を続けてきました。ここ7~8年は物流業界の顧客にも画像処理ソリューションを提供し続けてきており、近年、コグネックスとしてはディープラーニングやEVに結びつくソリューションと並んで、物流向けの製品開発が全体の半分近くを占めるようになり、ここ3年ほど多くの新製品を投入しています。」

物流部門の中でもとりわけECや店舗仕分けは自動化が進んでいる他、検品・梱包・仕分けの領域など自動化しにくいマニュアルオペレーションの効率化の部分でも当社ソリューションがお役に立っています。その他、物流・運送工程での入出荷委オートメーション、さらには空港貨物オートメーション領域にも進出しており、日本においてはちょうどコロナ禍の2020年からスタートだったため現時点では国内での導入実績は多くはないが、グローバルでは世界中の空港でコグネックスの画像処理リーダーが導入されています。

また当社はVision in Logistics(画像処理導入による物流効率化)というコンセプトで、バーコードリーダーが物流ソリューションの90%占める現状の中で、それ以外のソリューションをどう物流の庫内改善に結び付けられるか、を課題と認識し、体積測定(3辺測定)、並列走行検知、搬送物の形状分類などのソリューションもご提案しています。

具体的な当社製品の特長の一つとして、欠損コードの読み取り性能があります。それは当社が元来アルゴリズム作るところからスタートした会社であることが寄与しています。物流で使われる二次元コードは、カメラ撮像したときに斜めになっていたら読みにくくなりますし、外乱影響によってコントラストが悪くなったり、インクジェットプリンタの滲みなどで読み取りにくくなったりする場合も珍しくありません。数値的なパフォーマンスを示すことは難しいですが、当社独自のアルゴリズムを搭載する機器をご使用いただく事で、読取率アップや生産性向上に貢献出来ます。」

*

勉強会終了後は機種別委員会での会員企業講演、個別ミーティングを経て順次閉会、解散となりました。



武田智彦氏の講演の様子

第5回 機種別部会・全体勉強会

ローカル5Gはじめ先端取り組みのKCCS 森林素材を利活用するエースジャパン



2部構成の全体勉強会で講演コラボレーション

2023年度の第5回機種別部会・委員会が1月11日(木)に銀座ユニーク貸会議室(東京都中央区)にて開催されました。今回の全体勉強会は2プログラム構成で、はじめに「ローカル5G/Wi-Fi高精度位置測位からドローン活用、KCCSの取り組み紹介」と題して京セラコミュニケーションシステム(株)技術開発センター事業部長の日比 学氏が登壇、以下の要旨で講演されました(タイトル写真)。

*

「当社は京セラとKDDIを親会社とし、ICTと通信エンジニアリングを主な事業としています。本日は、3種類の無線ネットワークをベースとした位置情報ソリューションをご紹介します。

1つ目はSigfoxアセットトラッキングです。Sigfox通信機能付きのトラッキングデバイスをパレットやカゴ車に取り付け、現在位置を確認します。在庫の状況や紛失時の追跡といったユースケースで、物流関係の企業にご利用いただいています。

2つ目はローカル5G屋内高精度位置測位技術です。Wi-Fiの電波強度やBluetoothを応用したソリューションが出ていますが、より高い位置精度を提供できますし、ローカル5Gの高速・低遅延のメリットも享受いただけます。弊社は、以前よりローカル5Gインテグレーションサービスを提供しています。システムの低廉化により、ローカル5Gの採用事例も拡大すると思われすし、合わせて位置測位という付加価値を提供できます。

3つ目がWi-Fiの高精度位置測位技術です。これは、専用デバイスが必要となりますが、既存のWi-Fiアクセスポイントを、そのまま利用できることが一番の特長です。干渉法という原理を応用したもので、測位デバイスの消費電量を抑えることが可能です。測位のためのインフラをお客様側で整備する必要がないので、

導入コストを抑えることが期待できます。」

*

続いて、「山・森・街を掃除しながら仕組みはこの通り「山・森・街を掃除しながら『モノ』へ変化させる! 2025、大阪関西万博オリジナルベンチご提案!」と題してエースジャパン(株)代表取締役の判藤慶太氏が登壇、以下の要旨で講演されました。



エースジャパン判藤氏の講演の様子

「当社は環境議定書発祥の地の京都と奈良の県境にある関西文化学術研究都市に本社を置き、約14年前にベンチャーとしてスタートした。まだまだ弱小企業ですが、倉庫内の環境改善ビジネスに日々取り組んでいます。タイトルに掲げた通り、これまで山や森や街を掃除しながら、モノへ変化させるという事業をやって参りました。

まず物流の輸送用パレットとして4年前から販売を開始したのが「京パレット」です。木材を主要な素材としながらパレットのカテゴリとしてはプラパレットに分類され、海外輸出の際も燻蒸処理は不要、さらに管理にRFIDを用いた実証では通常のプラパレットより感度良好であることも判明しており、早いタイミングで製品化したいと考えています」

*

勉強会終了後は休憩を挟み、機種別委員会での会員企業紹介を経て順次閉会、解散となりました。

国内マテハンシステム生産額は12.2%増の1兆5,623億円、 世界4極合計は25兆3,960億円と24.4%の連続大幅増

2022年版マテハンシステム統計調査報告書より抜粋

◆調査の目的

マテハンシステムは、物流の自動化や省力化を通じて、産業の活性化、生産性の改善や市民生活の向上に重要な役割を果たすことが期待されており、その中核を担うマテハン業界の振興には、基礎的な統計データが不可欠です。

ところが、従来利用されてきた統計は、狭義のマテハンを対象とするデータに限定されており、現実的にマテハンシステム全体の実態を把握するためにはデータが十分ではない、といった問題を抱えていました。

そこで、本調査ではそのような背景を踏まえ、関係する業界団体の協力をあおぎながら、より広義のマテハンシステムに関するデータを収集し、正確な業界の実態を明らかにすること、具体的には4極会議（日本、米国、欧州、中国）への参加を通じて、グローバルに通用するマテハンシステム統計を継続的に調査することに加え、その結果を報告書として情報提供することを目的としています。

◆調査の範囲

本統計の調査範囲は、FEM（欧州物流機械連盟）の7つのカテゴリー分類に従っています。

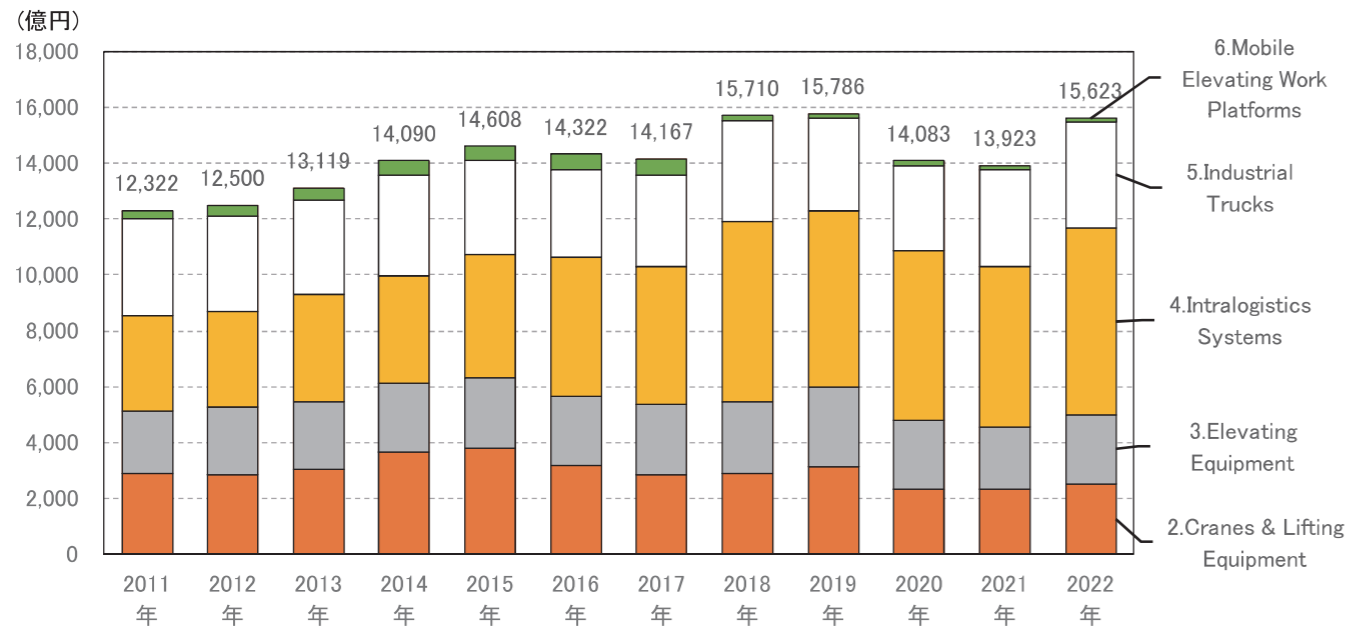
そのため本統計は物流関連の機器・システムをすべてカバーしているわけではなく、例えば、パレットやコンテナのような物流機材・輸送容器や動力のない運搬車両は含まれていません。

◆調査の期間

データの出典にある経産省「生産動態統計」については、2022年のデータとしては、2022年1月から2022年12月までの実績を調査集計したものです。

ただしIntralogistics Systemsについては、2022年のデータとしては、2022年4月から2023年3月までの実績を調査集計した業界データであり、これはJILS（公益社団法人日本ロジスティクスシステム協会）とJIMH（一般社団法人日本物流システム機器協会）の共同編さんです。

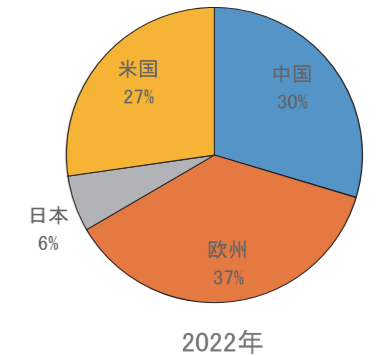
図表1 日本のマテハンシステムのカテゴリー別国内生産金額推移図



図表2 マテハン機器カテゴリー別国内生産金額推移

統計項目	(単位:億円)					
	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
1.Conveyors for Bulk handling	-	-	-	-	-	-
2.Cranes & Lifting Equipment	2,841	2,897	3,153	2,331	2,335	2,537
3.Elevating Equipment	2,512	2,565	2,833	2,493	2,222	2,476
4.Intralogistics Systems	4,965	6,438	6,327	6,055	5,756	6,671
5.Industrial Trucks	3,281	3,617	3,286	3,044	3,441	3,807
6.Mobile Elevating Work Platforms	568	193	185	160	169	132
7.Racking & Shelving	-	-	-	-	-	-
日本国内生産金額	14,167	15,710	15,786	14,083	13,923	15,623

図表3 4極の地域別シェア



◆日本のマテハンシステムの生産額

2022年の生産額は1兆5,623億円で、前年比12.2%の増加となりました。全体の約4割を占めるIntralogistics Systemsが15.9%の増加となったのをはじめ、金額の小さいMobile Elevating Work Platformsを除くすべての項目で増加となりました。

◆4極のマテハンシステムの生産額

日本、米国、欧州、中国の4極の団体から結成されたWMHA (World Material Handling Alliance) では、各国のデータを持ち寄ることでグローバルな統計を作成しています。

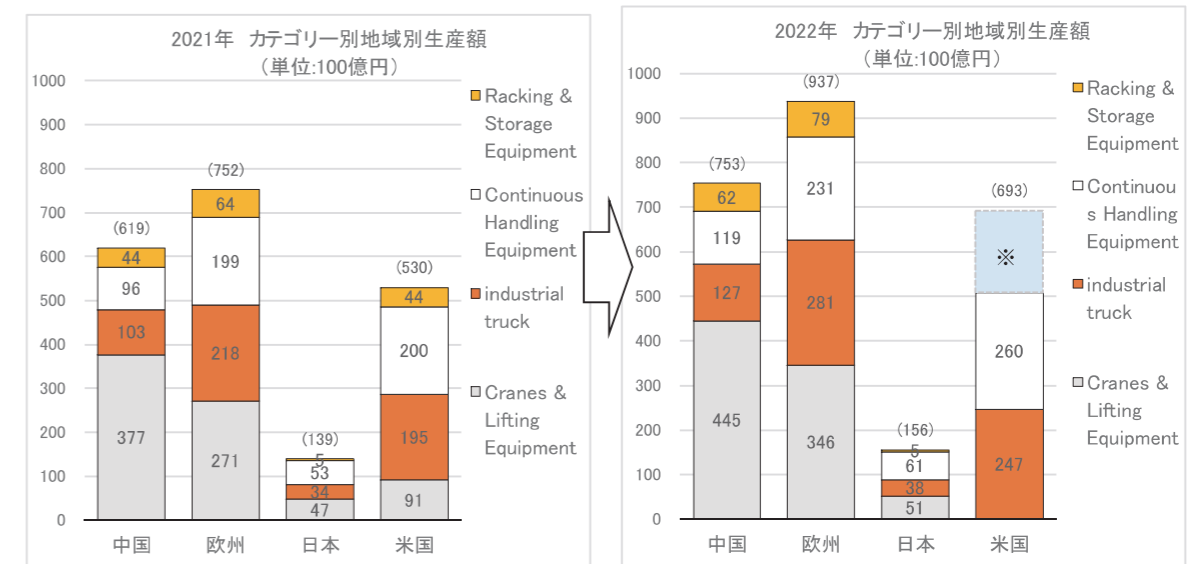
なお、欧州の2020年以降のデータは、英国の欧州連合 (EU) からの脱退の影響により、英国を含まないデータとなっており、2022年の米国のデータのう

ち、Racking & Storage EquipmentおよびCrane & Lifting Equipmentの内訳の数値は、公開データから算定困難であることから、不詳となっています。

統計データでは4極合計での生産額は25兆3,960億円に達して、前年 (20兆4,110億円) と比べ24.4%の増加でした。地域別に見ると日本は1兆5,623億円と前年比12.2%の増加で他地域もすべて増加、中国が6兆1,940億円から7兆5,290億円へと21.5%増加、欧州が7兆5,200億円から9兆3,750億円へと24.7%増加、米国が5兆3,040億円から6兆9,300億円へと30.7%の増加となっています。コロナ禍の半導体不足等による低迷からの回復進行に加え、円換算の金額の増加には、この間の円安も影響しているとみられます。

なお2022年のデータとしては、日本以外の3極は2022年1月から12月までの実績を対象としています。

図表4 2021年から2022年の4極の生産額の推移



第13期マテハン塾 発表会&修了式

3か月に及ぶ後期コースの総決算
5チームが物流センター構築案を競う



マテハン業界の未来を担う若手社員が切磋琢磨

2月21日(水)、2023年度の第13期マテハン塾本講座(後期コース)の発表会および修了式が、AP東京八重洲(東京都中央区)会議室にて行われました。当日は冒頭、藤井部会長が登壇し、以下のように挨拶しました(タイトル写真)。

「今日はこれまで3か月、5つのチームに分かれて皆さんが模索して来たことの成果を発表する場です。毎年、非常に興味深い発表のチームがあり、私自身、会社に持ち帰って参考にもしています。皆さんも今後このマテハン塾での繋がりを絶やさず、仕事の中で活かしていただきたいと思います」

挨拶に続き、マテハン塾塾長の三浦孝之氏が登壇し、発表会の課題等について以下のように解説しました。「皆さんにはこれまでの間、塾の後も持ち帰って宿題のように取り組まれ、頑張ったことと思います。課題は例年共通で、店舗別個別配送で効率の良くなかったドライ食品の物流を、一括納品可能な物流センター構築で効率化するということです。年間の通過金額と商品単価、ケース数を割り出して構築してもらいました。基本的に同条件で競う5チームによる発表で私も楽しませてもらいたいと思います」



チームEでんではらばらの発表風景

今回の課題には、受講生全21名がA～Eの5班(A: ARE、B: SOS解決隊、C: TODO Automation、D:

国士無双、E: てんではらばら)に分かれ、各チーム30分の持ち時間でプレゼンテーションおよび質疑応答を競い合いました。全チーム発表が終了した後は下代会長が登壇し、以下の要旨で挨拶しました。

「今日は皆さんの発表で楽しませてもらいました。私もこの業界で40年を越えましたが、私の新人時代はそれほど注目されていない業界でした。機械といえば工作機械、プレス機械という時代で、営業に回っても、マテハン? そんな贅沢なものには要らない、と言われたものです。それが今では、各種の機械の中でも最も注目されているのが、そのマテハンです。人手不足の中、工場で作られた製品を消費者まで届けるには、我々の自動化・省力化の機器が必要で、私自身、産業界の中で最も重要な役割を果たしている業界の一つと自負しており、皆さんにも誇りを持っていただきたいと思っています」



挨拶に立つJIMH下代会長



下代会長を囲んで最優秀賞チームEとの記念撮影

その後、厳正な採点・集計の結果、最優秀賞はチームEでんではらばらの5名(IHI物流産業システム: 堀込氏、ダイフク: 関根氏、日本通運: 藤田氏、フィイントラロジスティクス: 松本氏、村田機械: 大中氏)に決定、賞状の授与が行われ、当日の全プログラムが終了しました。

新入会員企業紹介 / 2024国際物流総合展 告知

【賛助会員】

コグネックス株式会社



コグネックス本社オフィス

コグネックスコーポレーションは、ビジョンシステム、ビジョンソフトウェア、ビジョンセンサなどのファクトリーオートメーション(生産自動化)を提供している世界を代表する企業です。加え、工業用バーコードリーダ業界においてもコグネックスはリーダー企業の一つです。

ハイエンドから汎用まで、お客様が求める精度に対応する幅広い製品をラインアップしています。

本社所在地: 東京都文京区本駒込2-28-8
文京グリーンコート23階
電話番号: 0120-301-448
公式WebサイトURL: <https://www.cognex.com/ja-jp>



開催概要: 国際物流総合展2024(第16回開催) Logis-Tech Tokyo 2024

- テーマ** 持続可能な道、物流の明日を育む
- 目的** 内外の最新物流機器・システム・情報等のソフトとハードを一堂に結集し、交易振興・技術の向上・情報提供・人的交流等を促進することを目的とする。
- 会期** 2024年9月10日(火)～13日(金) 10:00～17:00
- 会場** 東京ビッグサイト(東京国際展示場) 東1～8ホール
- 主催** 一般社団法人日本産業機械工業会、一般社団法人日本産業車両協会
一般社団法人日本パレット協会、一般社団法人日本運搬車両機器協会
一般社団法人日本物流システム機器協会、一般社団法人日本能率協会
公益社団法人日本ロジスティクスシステム協会
- 協賛** 関連約40団体(予定)
- 展示予定規模** 550社 / 2,800ブース **来場登録予定** 70,000名



編集後記

■お蔭さまで第12号を発行することができました。ご協力頂いた事務局・編集チームの皆様へ御礼申し上げます。

■2024年は能登半島地震による波乱の幕開けでした。被害に遭われた皆様には謹んでお見舞い申し上げます。また、追いつけるように発生した羽田空港での衝突事故。どんな1年になるのかと、暗雲漂う気持ちで1月を過ごしました。

■協会の事業活動では、国際ロボット展の共催・賀詞交換会開催・マテハン塾修了式と、2023年度の計画をつつがなく終える事ができました。皆様のご協力に感謝申し上げます。

■今夏にはパリオリンピックが開催されます。残りの月日が、楽しくハッピーなニュースで溢れる事を祈ります。(F)

一般社団法人 日本物流システム機器協会
広報誌「JIMH ニュース」第12号
2024年3月31日発行
〒104-0032 東京都中央区八丁堀3-3-2
スギコビル2階
TEL 03-6222-2001 FAX 03-6222-2005
<https://www.jimh.or.jp/>

